

郷土らがさき

第 139 号

発行 平成29年5月1日
発行所 茅ヶ崎郷土会
会長 青木昭三
編集責任 平野文明

逗子市亀岡八幡宮の狛犬と「狛亀」

片田明男



向かって右の狛犬

向かって右の狛犬は向かって右に口を開ける阿(あ)像が、左に口をつぶる吽(うん)像があるが、ここは両方口をつぶっているように見えるのである。拝殿に向かって右の像は子どもの獅子を連れた吽像である。写真ではよくは見えないが、この像は上下の歯を噛ん



向かって左の狛犬

向かって左側の像は牡丹の花らしいものを押さえていて、口はつぶっているようにも、少しばかり開けているようにも見える。台石の正面は牡丹の花、右側面に「納」、背面に「逗子町青年

JR横須賀線逗子駅と京浜急行新逗子駅の中間(逗子市役所の隣)に亀岡八幡宮(かめがおかはちまんぐう 逗子市五丁目)がある。この八幡宮の境内にはいくつかの石造物があるが、その中で、拝殿前にある対の狛犬と対の亀の像を紹介したい。まず吽吽(うんうん)の狛犬。普通は狛犬は向かって右に口を開

ている。台石の正面に牡丹の花、その左側面に「奉」、背面に「逗子町青年會逗子分會」と「副長 川瀬吉太郎」のほか「幹事」一名、「評議員」八名の名前がある。その下の台石背面には「會員」三十一名

逗子市亀ヶ岡八幡宮の狛犬と「狛亀」	1
アズミノイソラ(下町住吉神社の彫刻)	2
三浦一族の興亡	5
郷土誌など紹介『再発見!茅ヶ崎の伝統食』	7
市外史跡めぐり報告	8
会員投稿 「地引網」 「鳥居について」	14



向かって右の「狛亀」
 會逗子分會」と「會長 菊池精一」
 「幹事」一名、「評議員」七名の
 名前、左側面に「大正八年四月拾
 五日／八幡社／改築記念」の文字
 がある。その下の台石に「會員」
 三十一人の名前。
 これらの銘によって、大正八年
 (一九一九)、神社の改築記念に
 逗子町の青年会が奉納したもので
 あることがわかる。「唐獅子牡丹」
 の獅子であるところがしゃれてい



向かって左の「狛亀」
 とから生まれた呼称であって、今
 の社殿は大正八年四月に造営さ
 れた」とある。この二匹の亀は比
 較的に新しいものだが、「亀岡八
 幡宮」の社名にちなんで造立奉納
 されたものと見ることが出来る。
 どういう訳か八幡神社には亀
 や鶴がつく名前が多い。鎌倉には
 鶴岡八幡宮があり、茅ヶ崎市浜之
 郷には鶴嶺八幡社、平塚には鶴峯
 山八幡宮(境内の説明板に「その

ると思う。

次に「狛亀(こまかめ)」。狛犬の奥、拝殿のすぐ前に一対の亀
 がこちらを見ている。向かって右は口を開ける阿像、左は吽像。両
 方とも台石の背面に「奉納／株式会社石乃家 石橋豊旗／平成十七
 年十二月吉日」とある。境内に建つ説明板の「亀岡八幡宮 縁起」
 に、「亀岡とは、この地が亀の甲羅に似たなだらかな丘であったこ

社殿彫刻報告(その7)

アズミノイソラ — 南湖下町 住吉神社 —

多くの神社の建物にはいろいろの彫刻が施されている。茅ヶ崎市
 文化資料館が編集し、市教育委員会が発行していた『石仏調査ニユ
 ース ちがさきの石仏』に、それらの事例を「茅ヶ崎の神社彫刻」
 と題して六回掲載してきた。ところが同誌は平成二七年八月刊行の

昔鶴峯山八幡宮と称えられた…」とある)のごとくである。
 なお、「狛亀」のいい方は私が見つけたものである。狛犬の「狛(こ
 ま)」は高麗(こま) から来ているからへんない方といえればへん
 ない方だが、何かしっくりとしたものを感じ、気に入ったのでこ
 のように呼ぶことにした。

平野文明

二〇号のあと発行されなくなった。そこで、掲載していない事例を
 市外のものも含め、本誌に「社殿彫刻報告」として載せていこうと
 思う。一読していただければありがたく、お気づきのことや間違い
 のご指摘、あるいはご批判など頂ければ幸である。なお、『ちがさ



南湖下町 住吉神社の社殿彫刻

きの石仏』に掲載したものは次のとおりである。

同誌一四号「本村八王子神社の彫刻―剣を持つ男の正体―」

一五号「オロチを退治する神と、種類不明の鳥の彫刻―南湖中町、八雲神社―」

一六号「室田八王子神社の龍」

一七号「円藏神明大神の彫刻」

一八号「神功皇后の新羅侵攻―柳島八幡宮 鶴嶺八幡社 甘沼八幡大神」

十九号「鶴に乗って空を飛ぶ仙人のはなし」

これらは文化資料館のHPで見ることが出来る。「茅ヶ崎市文化資料館」↓刊行物↓茅ヶ崎自然の新聞・石仏新聞」と進んでいただきたい。

アズミノイソラ (安曇磯良)

南湖下町の鎮守、住吉神社の向拝(こはい) 彫刻は絵解きできなかつたものの一つだった。茅ヶ崎に職を得て引つ

越してきたとき、この神社のそばにすんでいたことがあるので私としては思い出深い神社である。それはもう四十年近くむかしのことだが。



竜王と龍とトヨヒメとイソラ

最近、『八幡愚童訓』という文献を読んでいると、「オッ」と膝を打つところがあった。この文献は、京都府八幡市にある石清水八幡宮の祠官が八幡大菩薩の靈験談を鎌倉時代にまとめたもので、私は岩波思想大系二十『寺社縁起』に甲・乙二種類が収録されている中の甲を読んでいる時だった。該当する部分は冒頭(同書一七〇頁から)にある。たいへんややこしい物語だが、要点を現代語訳するとおおよそ次のとおりである。

長門国豊浦(今の

山口県の最西端。関門海峡に面する)で夫の仲哀天皇を失い悲しみの中にある神功皇后に天照大神が乗り移って託宣した。

「朝鮮半島の国々はすでに十万人八千艘の軍船を出して、数万の軍兵が今来襲しようとしている。敵がこの地に着く前に急ぎこちらから異国にむかうべきだ」と。そして神託のとおり四天王山で折っている虚空蔵菩薩が現れて彦波瀲命(ヒコナギサノミコト)と名乗り、「我が子、月神は武神だから大將軍に任じて隣敵を攻めよ」という。『八幡愚童訓』はこのヒコナギサは住吉大明神であり、その子月神は高良大明神(コウラダイミヨウジン)であると記している。

ヒコナギサ(住吉大明神)の助力を得て四十八艘の軍船が完成した。誰を舵取り(航路の案内人)にすべきかという段になり、ヒコナギサが「常陸の国の安曇磯良(アズミノイソラ)は年久しく海中に住むので海の案内者に最適」とアドバイスする。これを受けて神功皇后はコウラ(高良大明神)に藤大臣連保という仮の名前を与えイソラに依頼に行かせる。しかしイソラは「自分は海底に住むのでカキなどが顔に吸い付いて動けない」と拒絶する。そこでコウラがそれを取り除いてやるが、若い女神のイソラは「痕が見苦しいので三日の猶予を頂きたい」という。

住吉大明神(ヒコナギサ)がさらにいうには「南の大海に住む娑竭羅竜王(シャガラリュウオウ)は早珠(かんじゆ)と満珠(まんじゆ)の珠を持つている。これを借り受けて異賊を降伏せよ。珠を借用するための使いには、皇后の妹の豊姫(トヨヒメ)が適任だろう。トヨヒメは世に類のない美女で、竜王と言えども心を解かないはずはなからう。また、そのお共にはコウラとイソラを付けよう。イソラはお神楽がたいそう好きだ。神楽を始めれば急ぎ来るはずだ」と。そして自ら拍子を取って歌い始めると多くの男神、女神が共に踊り、それを見たイソラは亀に乗って駆けつける。しかしあ

まりに顔が醜いのでいい、衣の袖を解いて顔を覆って細男(せいのう)という舞を舞う。

イソラの案内で藤大臣(月神でありコウラ)を供としたトヨヒメは竜宮城に到着し、難なく二つの珠を竜王から得る。皇后はそれを持って出陣する。ところが敵兵はこちらの十倍もいる。そこでコウラが早珠を投じると潮が引く。陸が出現して喜んだ敵兵が船を下りて攻め来るときに満珠を投じる。潮が満ちて敵兵は押し流され、勝利を得た。高良大明神を玉垂宮(たまだれぐう)というのは、早珠を投じたことに依ると『八幡愚童訓』は解説している。

以上の物語を頭に入れて住吉神社の彫刻を見てみよう。まず、この彫刻に登場しているのは向かって左方に、右の手を振り上げ龍に乗る男神の像。その手首は欠けているが、龍の頭とおぼしき先には左の手に何かを持ち、右の手を龍の方に向けて座る女神の像がある。その女神の頭の上方には右の手の袂で顔を半分覆い、左の手で長く伸びた布を持つ立ち姿の女神の像がある。龍の尾は向かって右方にうねっている。そして所々に波頭が立っている。

波頭から海上であることが分かる。しかし彫刻の欠点をいうならば、龍の頭の部分の様子が今一つ分からないことだ。男神像の右手先が欠けているように、龍の頭にも欠損があるのかも知れない。

私はこの絵柄を、トヨヒメがシャガラリュウオウに早珠と満珠を借りている場面ではなからうかと推測する。場所は竜王の住む竜宮であり、立ち姿の女神はイソラだと思ふ。なぜなら、右手の袖で顔を覆っており、また左袖の先が竜王の方に長く伸びているからだ。しかし、その先を龍がつかんでいるのはなぜだろう。また、座った姿のトヨヒメが左手で抱える器に入っているのは二つの大切な珠のように見えないのだ。まるでお団子のようなものだ。ここにも疑念が残る。彫刻の雰囲気では、立ち姿はイソラではなくトヨヒメ、座った

姿がインラのようでもある。

疑念が残るとしても『八幡愚童訓』の物語の一節を表したものと私は解釈する。その決め手は、この南湖下町の神社名が住吉神社であることだ。彫刻には住吉大明神は現されていないが、神功皇后の新羅征討を助ける住吉の神の功績がこの彫刻の主題であると考えるのである。

彫刻の裏に作者名があった。

彫刻師／伊藤岫雲之作／昭和参年／五月中旬（「／」は改行の

相模のものゝふたち 三浦一族の興亡

一、源頼朝旗上げ前の相模国武士団の勢力図

治承四年（一一八〇）源頼朝が伊豆国韮山で旗上げする以前の相模国の勢力図は次の通りです。（注1）

海沿いの二大勢力①は相模国南東部の三浦一族（三浦・和田・佐原・岡崎・真田等）、今一つは②南西部の中村一族（中村・土肥・土屋等）、そして③に隣接する④鎌倉党（大庭・懐島・梶原・俣野等）、山沿いには④波多野一族（波多野・松田・河村等）、最後に⑤武蔵系のグループ（海老名・渋谷・愛甲等）で、このグループは本来の根拠地は武蔵国ですが、そこから相模国に進出してきたものです。（各武士団の割拠については、注1の巻頭（五頁）に掲載されている付図、「源頼朝の挙兵と相模の武士団の動向」をご参照下さい）。

二、三浦氏始祖から三浦義明まで（注2）

印）「岫雲」は「しゅううん」と読む。関東大震災後の再建時に作られた彫刻であろう。しかし、「彫刻師 伊藤岫雲」がどこの人なのか、また他に作品があるのか無いのか、私は寡聞にして全く知らない。ご存じの方が居られたらぜひとも教えを乞いたい。よろしくお願いいたします。

住吉神社の脇障子も解けない絵柄の一つである。何の物語か類推は付くのだが決め手がない。いずれ改めてご紹介しようと思う。

（平成二九年四月五日）

源 邦章

①三浦一族に限らず桓武平氏の末裔平良文を祖とする一族は鎌倉党、中村一族、渋谷氏があり、坂東各地には秩父党、千葉・上総氏等が割拠しています。近年この系図に疑義が生じており、現在では三浦一族の祖で文献に表れているのは三浦為通で、前九年の役（永承六年一〇五一〜康平五年一〇六二）に源頼義に従って戦功を上げ、相模国三浦の地を与えられたことに始まると言われております。

②その子為次（継）は源義家に従って、後三年の役（永保三年一〇八三〜寛治元年一〇八七）に参陣しています。

③天養元年（一一四四）源義朝が相模国大庭御厨へ侵入した事件が起こり、ここに為次の子吉次（義継）、孫の吉明（義明）の名が出てきます。この侵入事件に相模国の武士中村庄司宗平・和田太郎助弘も登場しています。

③三浦義明は「三浦大介」と呼ばれているが、この「大介」という称号は、当初国守が自分の任国へ命令を下す文書に用いしたが、のちには在国の役人(在庁官人)の内で最高の実力者である地方豪族が称するようになっていきました。関東では三浦氏や小山氏が「大介職」になっています。

三、三浦義明(衣笠城落城まで)

①源頼朝旗上げ時、三浦義明は三浦義澄・和田義盛等へ三〇〇余騎を率いて加勢させたが、途中酒匂川が増水した為合戦に間に合わず、源頼朝軍は安房へ向けて敗走しました。

②三浦軍はこの敗報を聞き三浦半島へ引き返すも、その間に平家軍との小競り合いが理由で、畠山・川越氏等の大軍が三浦氏の本拠地衣笠城に攻めて来ました。数で劣る三浦軍は奮戦空しく翌日落城、頼朝と合流させる為一族を安房に逃し、義明自身は城に残り討ち死にしました。

③この結果三浦一族は鎌倉幕府の要人となっていた。三浦義澄は三浦一族の統領となつて三浦一族を束ね、和田義盛は鎌倉幕府初代侍所別当(長官)となつて幕府の重責を担っていました。しかしながらその結果建暦三年(一一二二)の和田合戦、宝治元年(一一二四)の宝治合戦で両氏とも壊滅しました。

四、三浦義澄・義村(注3)

①三浦義澄は父義明討ち死の後、安房で頼朝と合流して父の後を継ぎ「三浦介」を称しました。その後平家追討や奥州合戦にも従軍、建久元年(一一九〇)の頼朝上洛にも従つて活躍しました。相模国の守護となり、頼朝没後は宿老の一人として一三人の合議制にも加えられました。正治二年(一一二〇)没。

②三浦義村は義澄のあとを継いで三浦一族の統領になりましたが、義村の名を一躍上げた事件が「和田の乱」でした。「三浦

の犬は友をも喰らう」と呼ばれたように、三浦義村は和田合戦時、当初は和田義盛に味方する予定でしたが、義盛挙兵前に心変わりして挙兵のことを北条義時に密告しています。この義村の密告のメリットは、三浦一族の家督権を脅かす存在の排除(和田義盛)、中村氏滅亡による相模国務の一元的掌握、恩賞地拝領による所領の拡大が考えられますが、その他では北条氏に対し「心変わり」によって、貸しを与えるということがありました。その後義村は自らの地位を安定すべく時の執権である北条氏と蜜月の状態が義村の死(延応元年・一二三九)まで続きました。

五、三浦泰村・三浦氏の滅亡(注4)

三浦・北条の協調は時の執権北条泰時の有力御家人に対する和策に基くもので、その手段としては両家の姻戚関係を密にすることによって生じておりました。さらに四代将軍藤原頼経が長じることによって一派を形成し、北条氏と対立するようになって来ました。従来より三浦氏は將軍家、執権家に次ぐ第三の地位にありました。そこに安達一族が三浦氏を脅かす地位に就き、三浦一族対北条執権家・安達一族の戦いになり(宝治合戦)三浦一族も奮戦しましたが、三浦方は敗れ、鎌倉法華堂にて三浦泰村以下五〇〇余人が壮烈な自害を遂げ、三浦一族は滅亡しました。

六、その後の三浦一族

宝治合戦の結果、三浦一族が完全に滅亡した訳ではありません。佐原盛連(義澄弟義連の子)の子息は北条時頼と縁戚関係にあつたため、北条方に味方し盛連の子盛時は三浦介を継承しています。しかし当初は三浦氏がかつての勢力を失い、得宗被官として鎌倉時代を生き延びました。やがて元弘三年(一一三三)鎌倉幕府が滅亡しますと、三浦一族は次第に勢力を回復し、相模国の守護に

なり、戦国時代に北条早雲に滅ぼされるまで、相模国内に大きな勢力を持ち続けていました。

(注1) 永井路子『相模のものふたち―中世を歩く』有隣堂刊

有隣新書 二四二頁

(注2) 湯山 学『相模武士―三浦党』第二巻 戒光祥出版刊

茅ヶ崎に関係する郷土誌など紹介

『再発見！茅ヶ崎の伝統食』

松本美虹

『再発見！茅ヶ崎の伝統食』というパンフレットが発行された。平成二八年度の市民活動げんき基金を活用して作られたもので、企画・制作は「ふくの会」生悦住型造さん。市内各地区の多くの方が協力し、かつての茅ヶ崎の食生活についてカラー写真と共に解説してある。

食に関する記録は自治体史の民俗編などで見受けられるが、食材そのものを残すのは困難であるため、視覚的な記録が残りにくい懸念があった。このパンフレットを作成するためには、新たに調理、撮影という作業を行ったという。今後に残る視覚的な記録となるだろう。

メニューは全体的に見て、油の多い食材が少ない。かつての食生活では、油物を摂る機会は少なく、自然の食材が調理されていた。暮らしが変わるに伴い食材も変化していることがわかる。

ごはんについて、今の私たちは「ごはん」と聞いた時、白米を思い浮かべる方が多いと思われる。だがかつてはオバク、ヒキワリメシなど様々なものを「ごはん」として食べていたことも記されている。茅ヶ崎の食生活の記録は複数あったが、今回は、多くの方々に新た

六頁より

(注3) 野口 実「執権体制下の三浦氏」三浦古文化研究会編『三

浦古文化』三四号所収 九頁以下

(注4) 久保田和弘「他氏排斥三浦泰村」新人物往来社刊『鎌倉と

北条氏』所収

に話を伺ってメニューを再現したという。また解説の文章は、神奈川県史民俗編をはじめ、市内の文献はもちろんのこと、藤沢市や平塚市などの報告書を元にまとめている。写真をたくさん用いて見やすくかつ分かりやすい。地域の食生活を見直すきっかけになれば良いと思う。

(編集子注)

松本さんは文化資料館で民俗担当の嘱託学芸員として勤務されている。日本民俗学や民具学に造詣が深い。標記の印刷物が作られたことから紹介記事をお願いした。この印刷物の作成には茅ヶ崎郷土会の会員も協力をしているので、なるべく多くの方に知ってもらいたく、専門家の立場からの原稿としていただいた。

なお、『再発見！茅ヶ崎の伝統食』の内容を記すと、「一日の食事アサメシ・ヒルメシ・オコジュウ・ユウメシ」「オバク・ヒキワリメシ・ムギメシ・カテメシ」「アワツブカシ・イモダンゴ・ヤキビン(カップ)」

カラー写真は約五〇枚。珍しいメニューでは、米+麦+さつまいもや米+麦+海藻のミトリメシ、小麦粉を水で溶いて薄くのばして焼いたカップ(ヤキビンともいう、河童の頭の皿から付いた名)などがある。

市外史跡めぐり報告

二七七回 相模のものものふたち編(No.4)

梶原景時と寒川神社 — 寒川町 —

西 輝幸

平成二八年一月一日(月) 参加者 六名

寒川町の梶原景時ゆかりの史跡とその周辺を巡った。当初一月二四日の予定だったが雪のため中止となり、一週間延期しても朝から大雨で、中止を考えたが、折角集まって頂いた方々の意向もあり実施した。幸い午後からは晴れとなった。

茅ヶ崎駅からバスに乗り寒川の一之宮バス停で下車。少し行くと①**梶原景時館跡**がある。景時は桓武平氏の末裔で、鎌倉土着の武士。治承四年(一一八〇)八月源頼朝が石橋山で挙兵の際は一族の大庭景親と共に平家方について戦った。合戦に敗れ、箱根の山中を逃げまどう頼朝を逃がして救い、後に頼朝に仕え、治承五年(一一八二)頼朝の家臣となり、この一之宮の地に館を構えた。ここには内堀や外堀の伝承地もあり、天満宮も館の一部と伝えられている。

頼朝に従って義仲追討、平家追討などで功があり頼朝に重用されたが、正治元年(一一九九)一〇月新将軍源頼朝の時鎌倉を追放され、翌年密かに京都に上る途中、駿河国の在地武士に攻撃され敗死した。

すぐ近くの民家の裏側に②**伝梶原七士の墓**がある。正治二年(一一二〇)正月、梶原景時一族郎党は一之宮を出発、上洛の途中清水で討ち死にしてしまったので、一之宮の留守居役であった家族、家臣らとその者達を弔ったと言う説や、景時父子が討ち死にしているから、しばらく景時の奥方を守って信州にかくれていた家臣七人が、世情が



梶原景時館跡にある天満宮

変ったのを見て鎌倉に梶原氏の復権、所領安堵を願い出たが許されず、七士はその場で自害し、それを祀つたものとも言われている。

次に東の方に少し進むと③**南泉寺**がある。山王山、真言宗。『新編相模国風土記稿』(以下『風土記稿』と表記)一之宮村の項に「山王山明王院と号す。古義真言宗岡田

村安楽寺末、不動を本尊とす。開山善清、天正年中(一五七三〜九二)創立」とある。南泉寺の東側には④**一之宮八幡大神**がある。『風土記稿』に「若宮八幡宮 妙光寺持」とあり、祭神は菅田別命以下八柱の神。元禄一〇年(一六九七)の創立と伝えられている。梶原景時

が一之宮に館を構え鬼門除の神社として創建したという説もある。明治一一年琴平社、天神社、境内社である荒神社、稲荷社が合祀された。例祭(八月)の宵宮で行われる一之宮八幡大神屋台神賑行事は、町指定重要文化財である。

東に少し進むと江戸時代の中瀬村となり⑤景観寺がある。天平宝字元年(七五七)創立と伝えられている。『風土記稿』に「窪田山と号す。天台宗大住郡一之沢淨発願寺末、本尊十一面観音。鐘明和七年(二七七〇)八月鑄造」とある。本尊の十一面観音菩薩立像は町指定重要文化財で室町時代の作と推定されている。境内の宝篋印塔は享保一二年(一七二七)念休が建立。念休は享保八年から三年半をかけて全国霊場を行脚し、願文などと全国四百社寺の札帳をこの塔内に納めた。ここから相模線の線路を越え寒川駅北側にある安楽寺に向かう。⑥安楽寺は近世村岡田村に位置し、山号は大塚山、真言宗。養老年間(七一七〜七三三)建立の町内最古の寺と伝えられ、高野山高室院の末寺。本尊の大日如来坐像は町指定重要文化財。安楽寺の西側に隣接する⑦大(応)神塚古墳は、全長約五〇メートル、後円部高さ五メートルほどの前方後円墳で五世紀代のものと考えられている。町指定重要文化財となっている。ここから西方に進み興全寺に向かう。

近世村宮山村に位置する⑧興全寺は寒川神社の東側に隣接する曹洞宗の寺院。戦国時代末期に英顔麟哲(えいがんりんてつ)大和尚によって創建された。本尊は釈迦如来坐像で桃山時代の作。境内には相模子安地藏尊、とんがらし地藏(別名いぼとり地藏)、町指定重要文化財である宝篋印塔などがある。興全寺の西側に、⑨寒川神社がある。ご祭神は寒川比古命、寒川比女命の二柱。歴史は古く、延長五年(九二七)に編纂された「延喜式」神名帳に名神大社として名を連ね、相模国一之宮として永く崇敬を集めている。特に八方除けの

守護神として知られている。神社の裏手境内には神嶽山神苑(かんだけやましんえん)と方徳資料館があり、一般の方は入苑できないが、当会々員の平野文明さんから寒川神社神職の禰宜 石腰 亮さんに入苑をお願いしてあつたため、参拝のあと入苑することが出来た。内門の中は素晴らしい池泉回遊式庭園になっていた。一般の入苑は本殿で御祈禱を受けた方に限られているとのことだったが、石腰さんには特別のお計らいを頂き、改めてここにお礼を申し上げます。苑内にある茶屋で昼食と休憩をさせて頂いた。神苑の一角に寒川神社方徳資料館があり、神社の歴史と「八方除」についての資料が展示されており見学した。

本日の予定はこれで終了し、宮山駅から相模線で茅ヶ崎駅に戻って解散した。

第二七八回 相模のものふたち編 (No.5)

岡崎氏と土屋氏 — 平塚市 —

源 邦章

平成二九年一月二七日(金)

参加者 一六名

平塚市内の岡崎氏、真田氏、土屋氏の居館跡をめぐる予定だったが、これら三氏の遺跡は離れており、しかもこれらを結ぶバスの便がなく、全てをめぐる計画を断念し、岡崎氏と真田氏のゆかりの地のみをめぐる。

岡崎氏 真田氏 土屋氏

岡崎氏の祖は岡崎義実で、三浦一族の総帥三浦義明の末弟、そして相模国西部に勢力を有している中村宗平の女(むすめ)を妻としている。その岡崎義実の長男が真田義忠(真田氏の祖)、次男義清



かつて岡崎義実も眺めたであろう岡崎から見る大山の山容

は中村宗平の三男土屋宗遠へ養子に入り、土屋義清となった。岡崎義実は、平治の乱で敗死した源義朝の鎌倉の居館跡に義朝の菩提を弔うための祠(ほこら)を建立したほど源氏への忠誠を示していた。

治承四年(一一八〇)の源頼朝の旗挙げの時には岡崎義実、真田義忠(与一)、土屋義清親子は直ちに参加、伊豆国の目代 山木兼隆を倒し、石橋山で大庭景親以下の平氏軍と戦った。その際、頼朝より、先陣を誰にするか問われた義実は、長男の義忠を指名した。この戦いは頼朝方三〇〇人、景親方三千人である。戦力の差はいかんともしがたく、先陣を切った真田義忠は奮戦するも、敵將の俣野景久に討ち取られてしまった。その後、頼朝は石橋山の義忠をまつる和一塚を訪れた。その場所には後年佐奈田霊社が建てられた。「相模のものふたち編」(No.3)で訪れた。)

頼朝の死後、岡崎一族、中村一族(土屋氏も含む)は次第に北条

執権と対立するようになり、建保元年(一一二一三)にはついに和田義盛が反抗した。和田方には土屋義清、岡崎義忠(真田義忠の長男)、豊田平太、四宮三郎などが参加した。当初は三浦義村も参加の予定だったが、挙兵直前に義村は寝返り、北条義時に密告し、そのために和田一族および和田方に味方した岡崎、中村一族は全滅してしま

岡崎氏と真田氏の居館めぐり

集合場所の茅ヶ崎駅からJRで平塚駅へ、それからバスを乗り次いで真田神社に到着した。この神社と天徳寺が真田氏の居館跡といわれている。真田神社は近隣より「真田の天王さん」と呼ばれて親しまれている。明治時代はじめまでは牛頭天王を祭り、明治三年(一八七〇)からは八坂神社、明治九年(一八七六)に現在の名に変わった。天徳寺は曹洞宗の寺院で、小田原北條氏の家来鈴木隼人が真田義忠の城跡を寺地として中興したとのことだった。境内には与一堂、白山堂や多くの石仏があった。

次いで岡崎義実の岡崎館跡に向かった。冒頭に書いたが真田の館跡と岡崎館跡を結ぶバスがないので、真田から鶴巻温泉に出て、小田急線で伊勢原に行き、そこからバスで御岳という所へ出て徒歩で岡崎義実の史跡の義実の墓に向かった。墓を出発して、後北条氏の城跡がある無量寺を通り、岡崎神社に行った。ここは岡崎義実の岡崎館跡の中心地で、先に訪ねた義実の墓の方まで館が続いていたとのことだった。岡崎神社のすぐ近くに岡崎公民館があった。この公民館の玄関の前に義実の像が立っている。義実は晩年は不遇だったが、長男の真田義忠を討った長尾定景を頼朝の命で預かったとき、定景の日々読経する姿を見て、頼朝に定景の赦免を願い出て許可された。像を見ていて、そのような優しさがにじみ出ている像だと思

った。茅ヶ崎にも、晩年は不遇だった懐嶋景能がいた。茅ヶ崎でも

全市をあげてもっと景能に脚光を当ててもいいように思った。その後、バスで平塚駅に戻り、茅ヶ崎駅で解散した。

第二七九回 相模のものふたち編(No.6)

和田氏と新井城と — 三浦市・横須賀市 —

山本俊雄

平成二九年三月二五日(土) 参加者 一六名

今年度の史跡めぐり「相模のものふたち」も最後の六回目を迎えました。

当日は好天に恵まれ、風が少し冷たいなかの絶好の史跡めぐりでした。私は後の予定(一六時大船で会合)もあり、最後まで皆さんと同行できるか不安もあって、下見にも参加させて頂きました。その時は雨でもあり、大船帰着が一七時頃になった事も不安の一要素でした。しかし、そんな思いは取越し苦勞の快晴でした。

辻堂出発組、他四人が逗子に先着、源さんから茅ヶ崎駅集合組と合わせ一六人での出発でした。

逗子より横須賀・長井方面をバスに揺られること約三〇分、途中立石手前の「子産み石」のバス停を過ぎ、子産み石を探したが、微かにあれかと気付くのがやっとでした。

その後、最初の目的地①浄楽寺(横須賀市芦名二丁目)に着きました。お寺は和田義盛開基で奈良仏師運慶による運慶仏五体(本尊の木造阿弥陀三尊像、不動明王立像、毘沙門天立像)が国の重要文化財と聞いていましたが、正確にはお寺は義盛の建てた「七阿弥陀堂」の一つで、運慶仏は義盛夫妻の発願によるものとの事でした。

平成二五年に国宝となった伊豆の国市にある願成就院の運慶仏

は、北條時政開基、発願なので、義盛が時政の向こうを張ったのは、と言われていたかと思えます。いずれ浄楽寺の運慶仏も国宝になるのではと思います。残念ながら仏像の見学は適いせんでしたが、平野さんがお寺に挨拶に行かれたところ、本堂を拝観できる事となり、予定外の喜びでした。運慶仏については、源さんより大きなカラー写真付で詳しく説明してもらいました。また収蔵庫の奥には、わが国の近代郵便制度を作った前島密の墓もあり見学しました。

見学後、境内入口では野菜やみかんと魚介類の朝市が開かれており、それを見ながらのバスの時間待ちも苦にならないようでした。(ここで私は重い夏みかん一袋を安さにつられてつい買ってしまいました、その後その重さに苦しむハメとなりました。)

次はバス停和田まで行き、②和田義盛旧里碑(三浦市初声町和田)和田義盛の本拠地屋敷があったと言われている場所)を見学する間、下見で行けなかった白旗神社を片田さんたちが場所確認に行かれ、昼食場所としてもOKと連絡を受け皆で向かいました。

予定では一つ手前のバス停赤羽根で下車し、天養院(三浦市初声町和田)和田義盛の鬼門鎮守として創建された)を見学の上、和田まで歩くコースでしたが、バス待ち等の遅れにより天養院は飛ばしました。和田義盛は茅ヶ崎郷土会の史跡めぐり「相模のものふたち」の第二回、衣笠城を訪れた時の三浦一族の総帥大介(おおすけ)義明の孫に当たり、剛勇で知られるも直情径行で、後の建保元年(一二一三)二代執権北条義時の挑発にのり、和田合戦を起こすも敗れて討ち死にしました。しかし、治承四年(一一八〇)の衣笠城落城に際しては大介義明の命により脱出、房総に舟で渡る時に真鶴から房総落ちの頼朝主従に会い、戦勝の暁には自分を侍所の別当にして欲しい、と三浦宗家を差し置き売り込む抜け目のなさも持っていたと言われています。



この細道の先は海岸に突き出た崖の上で三浦道寸の墓がある

③ 白旗神社 (三浦

市初声町和田) は急な石段上に狛犬が左右にそれぞれ二基、石段下横には庚申塔が多数並び、皆さん以上に忙しい平野さんの写真撮りの姿も見られました。参拝後昼食。石段下は陽当たりが良く、たまに車が通るぐらいのどかな小路で、ゆっくりとした昼食が取れました。

神社は和田義盛滅亡後、義盛の善政をしのび、弘長三年(一二六三)和田の郷氏がこの地に社殿を設け、白旗神社を称し

て祭祀を厚くしてきたと、境内に建つ説明板にありました。また白旗の名は義盛が文治二年(一一八六)平家討伐後、城内を開放、城内鎮護の八幡神社に大勝を報告したことに始まり、領民を交えた酒席で、戦勝の舞「初声」を舞ったとされ、「初声町」の名もそこから始まったと言われています。祭神は天照大神、和田義盛などとなっています。

和田の里を後にして、バス停長井で乗り換え、さらに三崎警察署前で油壺行に乗り換え終点で油壺。そこからマリンパークの手前、左の小道を東大三崎地震研究所に沿って歩くと一〇〇mほどで④新井城跡(三浦市三崎町小網代)の看板があり、研究所の中が本丸跡であることを確認しました。振り返れば木の間隠れに油壺湾が見え、波の静かな内海の奥にヨットハーバーも見えます。ここが約五〇〇年前の永正一三年(一五一六)北条早雲に攻め落とされた三浦一族の血で染まり、そのために油壺湾と名付けられた、とはとても思えないくらいの穏やかさです。

その後、マリンパーク正面に沿って右奥の繁みの中に、「新井城跡の碑」と三浦三浦道寸の子荒次郎義意(よしおき)の墓、更に左側を少し下ると⑤三浦道寸義同(よしあつ)の墓(所在地名は④に同じ)があります。その三方は急な崖となつた少し小高い所です。道寸は辞世の句を「討つものも討たるものもかわらけよ、碎けて後はもとの土くれ」と詠んでいます。傍流とはいえ鎌倉時代よりの名家三浦一族の、新興武士後北条氏に対する矜持かもしれません。

(初代早雲の時代はまだ北条氏を名乗っていませんから伊勢氏となります。)

以上で史跡めぐりは終了し、三崎口駅から京急電車を乗り継いで帰着しました。

(*) 三月三日付け毎日新聞に、浄楽寺の運慶仏が四月二日〜五月二八日に特別公開の予定と出ています。今年は三三年に一回の三浦半島薬師如来霊場総開帳に当たるからの事。問合せは同寺(046-856-8622)です。

参加者の声

二つの史跡めぐりで得たこと

小川正恭

一月二四日に行われた平塚市岡崎史跡めぐりの下見と、三月二五日の三浦市などの史跡めぐり本番に参加した。それぞれの対象地域の史跡とそれを取りまく地理や環境の中に浸って、得ることは多く、大変に楽しいめぐりができた。その中で、それまで覚え込んでいた知識の更新・訂正があったことを記して、感想の代わりにしたい。

(1) 二七八回 相模のものふたち編(No.5)

岡崎氏と土屋氏(平塚市)

一月二七日の本番には都合が悪く参加できなかったが、下見に初めて参加し、下見をどのように実行するかを知ることができた。平塚市からバスで向かったのは、平塚市岡崎の岡崎神社であった。ここで私の最初の思い込みにぶつかった。岡崎四郎義実(相模の国大住郡岡崎を領し頼朝政権のもとで御家人としてつかえたが、その居館たる岡崎城は、現在の伊勢原市岡崎の無量寺周辺である)と思いついて下見でまず訪れたのは、平塚市になった旧岡崎村の岡崎神社であり、そこでこの周辺が義実の岡崎城とされる所であると教えられた。一時期、私は伊勢原市分になった岡崎に住んでいたことがあり、岡崎義実の城は先述の場所と思いついていたのである。

しかし、案内役の源さんが作った史跡巡りの資料(「2平塚の城館を訪れる―1岡崎城と城所城」(これは平塚市博物館『平成二三年度春期特別展 平塚と相模の城館』が典拠だろうか。))には、発掘も含めた伊勢原市の総合的な調査の報告に基づく、次のような記

述がみられる。「岡崎城は、東西方向の谷によって南北二つのエリアに分けられ、居城といくつかの城郭群から成る。その「壮大な岡崎城は一五〇一六世紀の姿」で、義実が生きた「平安時代末の一世紀代の居館とは別のものと考えべき」である。義実の岡崎城は南の「南方方形郭群が想定されており、その中心は現在の岡崎神社境内と考えられている。」「居館はその西方の御所ヶ谷遺跡にあつた可能性が高い」等である。一五〇一六世紀の岡崎城については大森氏頼との関連を示唆するが、詳しいことは不明であるとしている。

義実の時代の岡崎城は、平塚西北部に張り出した伊勢原台地の先端に位置し、低地部を見晴らしていたのであつた。

(2) 二七九回 相模のものふたち編(No.6)

和田氏と新井城(三浦市・横須賀市)

ネット上に、「伊勢原市教育委員会 昭和六〇年『相模国岡崎城総合調査報告書』(埋蔵文化財発掘調査報告書)」の案内があり、そこでは次のように取り上げられている。①岡崎神社周辺の「岡崎氏等の前期岡崎城」と、②「伊勢原市岡崎の無量寺周辺」を中心とする「三浦道寸のよつた頃の後期岡崎城」とがあると。

①の岡崎氏は建保元(一一二二)年の和田義盛の乱(和田合戦)で和田方について滅んでしまった。しかし、この和田氏の本拠地(「和田義盛旧里碑」)は三浦市初声町にあり、その北方に鬼門の鎮守たる天養院があり、横須賀市芦名の浄楽寺も義盛が建てたと言われ、それぞれに重要な仏像がある。

この史跡めぐりは、義盛に関係する場所と、永正一三(一五二六)年の三浦一族の滅亡に関係する史跡の双方を訪れたと後で分かった。中学生の頃に遠足で大楠山を芦名の辺りから登り、半島の東側に越えた時以来、始めて三浦半島のそれより南側の地域に足を踏み

入れた事による気分の高揚に加えて、当地の歴史的知識が乏しかったので平塚北部の二つの岡崎城との関連を混同していたのだった。

平塚市岡崎に依った岡崎氏は和田合戦で和田氏とともに滅亡するが、根拠地は三浦市にあった。一五二二年に北条早雲により攻め落とされた岡崎城から逃れた三浦道寸(義同 よしあつ)は、鎌倉の住吉城を経て最後に新井城に籠もって壮絶に闘ったが、永正一三年に落城し、義同・義意(よしおき 荒次郎)父子は自刃し上杉系の三浦氏は滅亡した。新井城跡と父子の墓、そして油壺の海は印象深いものであった。

(3)最後に この感想を書くために、配付された資料を良く読み返

会員投稿

地引き網

中島幸子

茅ヶ崎海岸の風景も時代とともに変わる。

潮の流れの具合で、砂浜は狭くなった。どうも人工島ができたことが一因らしい。

わたしの住む近くの海岸は、台風がくるたびに人工島の廻りの砂が削られ、海辺をそぞろ歩いたり、子どもが遊んだりした砂浜はなくなりつつある。

その昔、国道一三四号は人が歩き馬車が通ったが、今は夏になるとオートバイが轟音を立てて行き交うのが若者の風物詩のようだ。

湘南海岸と音楽は、モダンな雰囲気醸す。かつて潮騒を聞きながら、加山雄三は「幸せだなあ」とうたい、その後サザンオール

し、またネット上の情報にも接し、ようやく二つの史跡めぐりの内容と、二つの戦いの間が三〇〇年もあることを頭に収めることができたようである。資料を読んだことに加えて、その歴史が生じ、そこに登場する人々が活躍した場所に行つて、身体を通して感じたことが大きく作用したと思われる。ついにながら、私は歴史の授業は好きであったが、歴史的出来事の年号や元号を覚えるのが大の苦手であったことが思い起こされた。未だにそうである。年号の数字が入りにくく作られた頭の構造に依るに違いない。最後に参考書を一挙げておく。「高橋秀樹二〇一五 『三浦一族の中世』(歴史文化ライブラリー 四〇〇) 吉川弘文館」

スターズが「チャコノ海岸通り」をうたつた。今は、人工島でロックが鳴り響いている。現代は人工島が似合うということなのだ。

久し振りで砂浜に出てみると、古い材木を組み合わせた小屋の中に何やら物が無造作に置かれている。一段下がった所には網を広げている手漕ぎ船がある。あれは地引網の道具なのだ。茅ヶ崎のセピア色になった写真では、この光景をよく見る。

浜須賀海岸エリアの自治会では年中行事に地引網をしている。会員の親類たちも楽しみにしていて、「今年も地引網をする」と伝えると遠くからもやつてくるそうだ。

年によっては不漁のこともあって、魚屋から調達して間に合わせることがあるが、むしろそんなことが多いかもしれないという。茅ヶ崎の名物行事は、大漁の年は大騒ぎで、自治会ではたらふくたべでも、網のなかにはまだどっさりあって、みんなで活きのいいところを買っていくという。生魚に恵まれている景気のいい話である。

鳥居について

綿引 進

鳥居は参道または神殿の周囲の垣などの入口に立てられた神域を示す門である。その語源は諸説ある。以前の呼称は、神門、御門などと呼ばれたそうである。一〇世紀なかば以降、社殿に回廊や四足門、楼門などが設けられて、神門の役はそれらに移り、鳥居とならざるをえなかった。

鳥居の起源は、日本起源説・朝鮮渡来説などがありさだかでない。その一つにビルマとタイ国境近くの山岳少数民族アカ(イユ)族が村の入口に門を立てて、その二つの柱に笠木のごとく木を渡し、その上に鳥形を載せ、地上に木製の男女の一对の像を置いて村への侵入者を見張っており、これが日本へ伝わり、道祖神の男女の像を生んだという話がある。日本へは稲伝来の弥生時代と考えられている。鳥居は陰陽を表し、左が陽柱、右が陰柱とされ、両柱に横木を渡し、「陰陽交感の理」を表すという説もある。

材質は木、石、金属、焼き物(陶器)、コンクリートなどがある。木製の鳥居を本式とするが、中でもヒノキを最上とする。昔、神を祭るに木の柱を立てた。今に残る諏訪大社の御柱はそのことに由来する。京都市右京区嵯峨野の野宮神社の鳥居は黒木鳥居といい、「クヌギの木の皮を剥かないまま使用する、日本最古の鳥居の様式」と同社のHPにある。

関東辺りではケヤキ製が多い。現在では大木がなくなり、大型の木製鳥居を作ることには困難になった。吉野や木曾などの優良ヒノキ林は国有地となり資源保護に努めているが、天然のヒノキ林はほとんど底をつき、現在では石造鳥居が九五%を占めている。昭和初期の花崗岩の産地は岡山県白石島、香川県高松市の庵治町、兵庫県神戸市の六甲山、岡山県岡山市の万成石(まんなりいし)、京都市の

白川石、愛知県岡崎市の三州みかげ石、茨城県稲田の稲田花崗などだが、八〇年以上過ぎた今では安価な中国産なども出回っている。

金属製鳥居は六世紀にさかのぼるといふ。鉄製はさびて年数が経つと見る影もなくなる。青銅製は細工がしやすく腐食されにくい事から多く建立された。慶長一五年(一六一〇)に発見された足尾銅山は、最初の六〇年から七〇年の間には、年間一五〇トンも採掘されたそうである。鑄造技術が発達し、多くの鳥居が建立された。銅装鳥居もある。木造や石造の鳥居を銅板で包んだもので、大正から昭和初期の銅安時代に建立された。神田祭で有名な神田明神のものは昭和五年(一九三〇)再建、コンクリート造りの上から銅板で覆っている。その他、総ステンレス製もあり、航空関係者を祭るジュラルミン製は銀色の輝きを放っている。

陶製鳥居は数は少ないが全国の焼物の産地に立っている。長大な柱を細分化して焼成してつなぎ合わせるので強度を保ちがたい難点からさほど普及していない。日本でのセメントの生産は明治八年に始まるとされる。セメントを使ったコンクリート製の鳥居は明治末期にでき始めて大型化が進んだ。

巨大なもののは出雲大社の大鳥居で大正四年(一九一五)に作られ、高さ二二・七m。山梨県富士吉田市鎮座の北口本宮富士浅間神社は一説に高さ一八m弱という。京都府京都市東山区祇園町の八坂神社の鳥居は、寛文六年(一六六六)再建の石鳥居で重要文化財指定を受け、高さ十二m弱(Wikipedia)とされる。大きいものでは、昭和三(四年)(一九二八(九))に竣工した平安神宮の鳥居(高さ二四m Wikipedia)、と名古屋市の豊国神社の昭和四年建立の鉄筋コンクリート製大鳥居(二四m ネット情報)など有名。ごく最近では、塩ビ管や、プラスチック製もあるが、取り上げる程のものはない。

茅ヶ崎郷土会 事業の報告

ワイワイまつりに参加



茅ヶ崎かるたでカルタとり

前田照勝

二月二十六日(日)、中央公園にて「ちがさきサポートセンター」が主催の市民活動サポートセンターが主催の市民活動の祭りである。近年は行政や地元企業の参加しており、バラエティーに富んだ出店を展示されている。参加団体数は六十七団体を数える。ステージのプログラムの数は一八だった。好天に恵まれたこともあ

り、多くの入場者で賑わった。私たち茅ヶ崎郷土会は「かるた遊び」と「コマ回し」をして入場

者に遊んでいただいた。サーブとしてクジ引きを用意したので、子ども連れの入場者に声を掛けやすかった。

「茅ヶ崎かるた」は、茅ヶ崎郷土会が制作し現在も販売を続けているものである。この日も初めて目にする方があり、絵札や読み札の説明を熱心に聞いてくれた。

コマは、柳島に「アトリ工響(きょう)」という名の工房を持つ永野良雄さんの手づくりのコマである。木製の台を床に置き、その中でコマ回しをした。大人も子供も、コマが回せるようになると喜びっぱいの表情をしていたのが印象的だった。

昨年までは野外にブースを設けたが、今年からサポートセンターの中に会場を移した。サポートセンター内では、手話教室や点字体験、手づくり絵本……等々、七団体のブースがあった。手のマッサージを試してみたり、万華鏡を覗いてみたりと、普段やったことのない体験ができた。これらも、活動団体が一堂に会する祭りならではの交流であろう。

来年度の課題としては、昔遊びのメニューを増やしてはどうだろうか。茅ヶ崎郷土会らしさを求める、そんな工夫が必要と思う。

これだけの催しを成功させるには、スタッフの皆さんの並々ならぬご努力のお陰である。敬意を表すると共に、心から感謝の気持ちを伝えたい。「ありがとうございました！」

平成二八年度の事業

茅ヶ崎郷土会はたくさんの事業を行っています。平成二八年度中実施したものの内、市外史跡めぐりの二七四〜二七八回は本誌一三七号から本号までに、市民文化祭に参加して行った「写真展 相模国修験道の聖地を訪ねて」と第四回市郷土芸能大会などは既刊号に報告してあります。これら以外の主な事業をここにまとめておきます。

郷土歴史民俗勉強会

- 五月一八日(水) 平野「茅ヶ崎の寺社⑤―鶴嶺八幡社縁起」
 - 六月一五日(水) 富永富士雄さん「茅ヶ崎の縄文時代①」
 - 七月二四日(日) 平山孝通さん「茅ヶ崎の頼朝、義経」
 - 八月一七日(水) 平野「茅ヶ崎の寺社⑥―八幡信仰の祭神」
 - 九月二一日(水) 富永富士雄さん「茅ヶ崎の縄文時代②」
 - 一〇月一六日(日) 平山孝通さん「茅ヶ崎の町村制の変遷」
 - 一一月一六日(水) 平野「茅ヶ崎の寺社⑦―平塚八幡宮」
 - 一二月一八日(日) 平山孝通さん「茅ヶ崎の寺子屋」
 - 一月一八日(水) 富永富士雄さん「茅ヶ崎の弥生時代」
 - 二月一五日(水) 平野「茅ヶ崎の寺社⑧―伊勢神宮の歴史」
 - 三月一五日(水) 富永富士雄さん「茅ヶ崎の奈良・平安時代」
- 会員外で講師を引き受けていただいた富永さんと平山さんにはあらためてお礼を申し上げます。勉強会は二九年度にも、話題提供を会員がつとめる形で続ける予定です。
- 市内史跡めぐり
- 六月二二日(水) 「堤貝塚と石上古墳」(堤く本村)
 - 一〇月一二日(水) 「七堂伽藍跡と高座郡衙址」(下寺尾)
 - 一一月二八日(月) 「懐嶋郷」(円蔵など)
 - 一二月一三日(火) 「源氏一族と茅ヶ崎」(下町屋く南湖)

- 一月一一日(水) 「日蓮聖人座像と石碑」(今宿く浜之郷)
- 二月二二日(金) 「善光寺式阿弥陀三尊と日蓮聖人座像」

萩園常願寺、今宿信隆寺、同上国寺さんでは市指定文化財の日蓮聖人像を、また西久保宝生寺さんでは国重文の善光寺式阿弥陀三尊像を直接に拝ませてくださいました。ありがとうございます。

勉強会と史跡めぐりは会員外にも公開し、それぞれ多くの方の参加がありました。また「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館の会」「茅ヶ崎文化人クラブ」「茅ヶ崎民話の会」と共催したものもあります。

『郷土ちがさき』の発行

- ・一三六号(二八年五月一日発行)
- ・一三七号(二八年九月一日発行)
- ・一三八号(二九年一月一日発行)

社会教育課主催

「丸ごと博物館企画展―丸ごと一〇―」の講演会に協力

- 三月二日(木) 原「茅ヶ崎と温泉」

同日 杉山「茅ヶ崎 柳島いま・むかし」

三月三日(金) 平野「茅ヶ崎の寺社彫刻」

市立中島中学校の地域交流会に協力

「茅ヶ崎かるた」「昔のあそび」 九月一七日(土)

編集後記

★新年度の活動が始まりました。当会の事業は総会の議決を経て決定されますが、今の段階の計画案を次ページに掲載しておきます。今年度新しく始める事業は「茅ヶ崎二十三ヶ村調査勉強会」。江戸時代の二十三ヶ村を順次取り上げようというものです。どの事業も会員外にも呼びかけていますので多くの方の参加を望みます。紙面デザインを変えました。いかがでしょうか。問い合わせ・連絡先 090-8173-8845 (平野)

平成29年度 年間事業

平成29年度 茅ヶ崎郷土会 年間事業
(網掛けは終了した事業)

2017/6/10印刷

開催物	(公開事業①) 市外史跡・文化財めぐり	(公開事業②) 市内23ヶ村調査勉強会 【会場 福祉会館及び現地】	会場・収容人数	(公開事業③) 郷土歴史民俗勉強会 【会場 福祉会館】	会場・収容人数	郷土しがさ き 発行
平成29年						
4月	大岡越前祭「越前守遺跡写真展」 ・総合体育館22日(土)・23日(日) ・民俗資料館旧和田家22日(土)	11日(第2火)13:30～ 準備会 25日(第4火)13:30～ 準備会	集会室2(36人) 集会室2(36人)	— —	— —	— —
5月	22日(第4月)280回 鎌倉市 北鎌倉の五山文化	2日(第1火)13:30～ 室内(中島村-1) 16日(第3火)13:30～ 室内(中島村-2)	集会室2(36人) 集会室6(24人)	— 16日(第3火)10:00～ 平野 市内の神社 伊勢信仰-2	— 集会室6(24人)	— 1日発行 (139号)
6月	26日(第4月)281回 小田原市 小田原城とその周辺	6日(第1火)13:30～ 室内(中島村-3) 20日(第3火)13:30～ 室内(中島村-4)	集会室6(24人) 集会室6(24人)	— 20日(第3火)10:00～ 岡崎 浜降祭のはなし	— 集会室2(36人)	— —
7月	—	4日(第1火)終日 現地調査(中島村-5) 18日(第3火)終日 現地調査(中島村-6)	— —	— —	— —	— —
8月	—	1日(第1火)13:30～ 室内(下寺尾村-1) 15日(第3火)13:30～ 室内(下寺尾村-2)	() ()	— 15日(第3火)10:00～ 源 相模のものふたち	() ()	— —
9月	中島中学校の地域交流会に協力 ・日程未定	5日(第1火)13:30～ 室内(下寺尾村-3) 19日(第3火)13:30～ 室内(下寺尾村-4)	() ()	— 19日(第3火)10:00～ 丸ごとの会加藤幹雄さん (未定)	() ()	1日発行 (140号)
10月	市民文化祭「相模のものふ展」 ・2日(月)～6日(金) ・市民ふれあいプラザ(市庁舎内)	3日(第1火)終日 現地調査(下寺尾村-5) 17日(第3火)終日 現地調査(下寺尾村-6)	— —	— —	— —	— —
11月	郷土芸能大会 ・23日(木 祝日) ・市総合体育館	7日(第1火)13:30～ 室内(△△村-1) 21日(第2火)13:30～ 室内(△△村-2)	() ()	— 21日(第3火)10:00～ 平野 市内の神社 伊勢信仰-3	() ()	— —
12月	—	5日(第1火)13:30～ 室内(△△村-3) 19日(第3火)13:30～ 室内(△△村-4)	() ()	— 19日(第3火)10:00～ 坂井 (未定)	() ()	— —
平成30年						
1月	—	9日(第2火)終日 現地調査(△△村-5) 16日(第3火)終日 現地調査(△△村-6)	— —	— —	— —	1日発行 (141号)
2月	サポセンワイワイまつり ・2月25日(日) ・市民活動サポートセンター	日取り未定 285回 小田原市 曾我の流輪馬	() ()	— 20日(第3火)10:00～ 平野 市内の神社 伊勢信仰-4	() ()	— —
3月	—	26日(第4月)286回 鎌倉市 太平記を訪ねる	() ()	— 20日(第3火)10:00～ 原 温泉の話	() ()	— —

★実施日・場所・テーマなどは変わることがあります。お問い合わせは平野文明(090-8173-8845) 源邦章(080-6784-3088) 山本俊雄(090-6174-2806)。
 ★公開事業② 23ヶ村調査勉強会の対象村・期日は変更することがあります。
 ★「市外史跡・文化財めぐり」集合は茅ヶ崎駅改札前午前8時50分。雨天のときは一週間後の同じ曜日・時刻に実施します。その日も荒天の場合は中止です。
 ★(公開事業①③)は、会員200円、会員外は300円ご負担願います。また②も含め必要経費が生じた場合は会員・会員外を問わず臨時徴収することがあります。
 ★(公開事業③)は、ちがさき丸ごとふさと発見博物館の会との共催です。
 ★交通費・食事・傷害等は各自対応してください。